布を創る ③

水で洗えるベルベット イトイ テキスタイル

松 尾 武 幸

家庭で水洗いができて、しかも、表面の毛羽が簡単に復元する。縫製工程も簡単というベルベットが開発されて、婦人、紳士のジャケットやコート、パンツやスカート、インナーなど、ドレッシャーからカジュアルまでの幅の広いアパレルのジャンルで活躍し始めた。

このベルベットは、日本のイトイテキスタイル(研究開発工場・大阪府岸和田市)の開発商品である(起毛織物材として特許出願中)。

商品名はエクメ(ecume)。従来のベルベットは、その素材が、シルクであれレーヨンであれ長時間着用すると、表面の毛面の毛羽が寝てしまう。また、縫製工程では、特殊なミシンが必要で難しかった。生地への輸送でも、毛羽を寝かさないようにするためには、横積みはできず、渦巻き状の円筒形の搬送用具にピンをつけてタテに吊るして送らねばならなかった。「何とかならないか」糸井徹さんは、考え続けた。

かねてから、糸井さんは、人間の身体には天然繊維が良いという考え方にたっている。天然繊維は、絹、綿、毛、麻などだが、同時に欧米では、ビスコース・レーヨンが、日本のように、半合成繊維に分類されずに、天然繊維の一つとして仕分けられていることに注目してきた。欧米人の定義では「天然繊維とは自然にかえる素材」ということで、ビスコース・レーヨンは半合成繊維ではなくて、天然繊維の方に分類されている。

「人間の肌に直接、気持ちが良いという繊維は、絹、綿、そして、ビスコース・レーヨンしかない」というのは糸井さんの持論である。

「しかし、絹は値段が高い。綿は肌に優しいが、柔らかさ、発色性、ドレープ性といったファッション性では、ビスコース・レーヨンが一番。しかも、値段が安い」。

だから、ベルベットの素材には、ビスコース・レーヨン(人絹)が一番良いと思っていた。

しかし、レーヨンには、水に濡れると縮む、収縮性が高い過ぎるという欠点がある。この収縮性が高いということは、実は復元力も強いというもう一つの特徴と裏表の関係にあるのだが、このレーヨンの特徴を生かしつつ、しかも、生地としての寸法安定性を保つにはどうしたら良いかが課題であった。

そして、ある日、窓から外を見ていて、網戸のネットが目に入った。

「これだ」。つまり、ベルベットのフレームを造る土台のネットは、ポリエステルのような丈夫で伸縮性のない糸で構成して、そのネットにベルベットの柔らかさ、発色の良さ、光沢が表現できるビスコース・レーヨン(人絹)のループ糸を、うまく絡ませてみたらという発想である。

糸井さんの言葉を借りると「レーヨンという繊維は熱に対して、無茶苦茶いうことを聞かない。これに対してポリエステルは無茶苦茶、熱の言うことを聞く繊維(熱可塑性)という全く相反する性質を持っているが、この相反する性質を組み合わせると面白いことができるのではないか」という考え方がそこにあった。

この糸の絡ませ方を、糸井さんは「サンドイッチ構造」と呼んでいる。

「生地の経緯はポリエステルで、寸法は安定していて、レーヨンの毛羽になる糸がそのネットの上下に密植された形」(糸井さん)である。

生地の表も裏も、表面として目につくところはすべてレーヨンの肌触り、そして発色。しかも水で洗っても縮まない生地の誕生である。

しかし、この生地はそうやすやすと誕生できたわけ

Textile Creation

著者紹介 TAKEYUKI MATSUO

Fashion Business Institute

ファッション・ビジネス総合研究所 代表取締役

著者は、アパレルを中心としたファッション・ビジネスの研究を専門とされ、著書に「アパレル産業ハンドブック」(東洋経済新報社、1996、共著)、「よく分かるアパレル業界・日本実業出版社、1992、共著」他がある。

本稿では、「産業の空洞化」に抗して、日本のクリエイターたちの「布を創る」努力と業績を紹介していただいた。

はない。

レーヨン糸とポリエステル糸の絡み方、その組合せの割合をどうするか、すべて実験の連続であった。ポリエステル糸のネットからレーヨン糸が抜け落ちてはいけない、理論どおりにはいかない実験。その繰返し。

こういう中から、ビスコース・レーヨン75%、ポリエステル25%の最適の組合せ方を見つけた。この手のビスコース・レーヨン糸は東邦レーヨンが開発した「エムリ」が最適であることもテストの結果である。

「エクメ」(ecume)というブランド名は、かつてフランスの帆船レースで活躍した「エクメ・ド・メール」という船の名前からとっている。帆船が走る時、船の後尾に白い泡がたつ、その表情がエクメ・ド・メールの元の意味だが、糸井さんは、その表情がどこか似ているのでブランド名にしたという。

「皆さんは、始めのうちは、水で洗っても縮まないレーヨン・ベルベットなんて造れるわけない、と半信半疑だったが、実際に家庭で水洗いしたジャケットが、洗った後の方が風合がよくなるとビックリしてくれた」(糸井さん)このベルベットは、水で洗えるだけでなく、洗って、タンブラー乾燥する方が風合が良くなることが特徴である。

「そこまで、もっていくためには、何台洗濯機を潰したか」実際、糸井さんはこの商品の開発の間は、工場(大阪府岸和田市)でだけでなく、生地の開発が進み、アパレルのサンプルができ上がってくると毎日、自宅にも実験用の衣服を持ち帰り、洗濯機にかけ洗いに洗い、乾燥機に

かけたという。「単に、縮むだけでなく、伸びても困りますからね」。「工場ではいつも、洗濯機につきっきりということはできないが、自宅なら、洗濯機や乾燥機を眺める時間はつくれる。一杯飲みながら、風呂に入りながらでもできる。この乾燥は強すぎたとかね」この辺に来ると、エンジニア社長の生活の達人ぶりがありあり。しかし、奥さんの方は「お父さん、もういい加減にしてよ」と悲鳴をあげることもあったという。

アパレルの製品として売るには、表地のベルベットだけが洗濯できるだけでは駄目で、同様の耐洗濯性を持った、裏地、芯地、付属の開発も不可欠で、この面では、関連業者のバックアップが心強かったという。

ベルベットの開発には、熱に対して全く相反する反応をするビスコース・レーヨンとポリエステルの組合せの面白さに引かれたことが一つの強い動機になっているが、もう一つの動機もあるという。

それは、糸井さんの考えている布には大きく分ける二つのタイプがあるという発想と関係がある。

糸井さんに言わせると、布には、平、綾、朱子といった組織識別の分類とは別に、それらをすべて含んだ平面的なもの、つまり、フラットなタイプの生地と、毛羽がたっているというか、厚みのある立体的な生地との二つのタイプがあるという。いわば糸の背中を見せているのが、フラットなタイプ、糸の先を見せているのが、厚みのあるタイプという。毛羽だちのタイプを、もっと具体的にいうと、ペロア、モッサリ、タオル地、アストラカン、そしてベルベットなどである。

(A)

(B)

Washable veluet "ECUME"

(A)洗濯機で洗い脱水機で脱水した状態

(B)洗濯機で水洗いし脱水後、乾燥機でタンブラー乾燥上りのままの状態(プレスなどしていない)

この両方とも人類の有史以来何千年の歴史をもつ。しかし、どちらかというと、毛羽だちタイプは技術が必要だから、後から生まれてきている。このタイプはどうしても厚地になるが、光線が吸収される結果の色の深みや豪華さはある。しかし、ドレープ性は出にくい。ベルベット、別珍、コーデュロイには生地表情はあるが、ドレープ性には欠ける。着心地もいい方ではない。重さも出てくる。縫製もしにくい。消費者の扱いもしにくい。

これらの欠点をなくして、毛羽だちタイプなのに、軽くて、着心地が良くて、縫製しやすい、ドレープ性もある、しかも、深みのある色、肌触りの良さがある生地ができないかという思いがあったという。

糸井さんは、自分のアイデアが浮かんできた時はいつでもメモができるよう、と筆記用具を持ち歩いている。寝床に入ってもそうだ。

そうした中で、何とかレーヨンが生かせないかというアイデアが浮かんできたという。

こうして生まれた新しいベルベットの洋服は、横た

みに搬送しても何ともない。水洗いして出してきた洋服を乾燥機にかけて、一晚ハンガーにかけておけば、襟の部分もふくめて、完全に復元する。むしろ良くなる。

こういう洋服は縮絨効果が出てしまうウールでは無理で、洗って乾燥機にかけると元よりふっくらする綿のタオル地にひかれた。それをレーヨンでできないか、その意味ではこの商品企画は始めにベルベットがあったというよりは、ビスコース・レーヨンを生かして厚みのある生地をと研究していった結果、ベルベットに到着したと言えるかも知れないと糸井さんは言う。

糸井さんは言わなかったが、この水洗いのできる特性は、今、ドイツなど欧米先進国で、公害の発生源の一つと目の敵にされ始めたドライ・クリーニング拒否の流れの中で、極めて重要なセールス・ポイントになる可能性がある。

(株)イトイテキスタイル 大阪府岸和田市包近町358-1,
電話：0724-45-8800, FAX：0724-45-8908)